airiti

# 由基本結構往進階結構探索日文文章的基本結構

落合由治
淡江大学日文系副教授

摘要

日文文章研究派別，大略約可分為兩個學派。其立場不同在於，一為堅持從文節的單位而至文章成立的路線或規則的探究。一為從一開始就視文章整體為一個完整的研究對象。

而本論文是以後者的立場為依歸，以考察特定的作家的一定量的作品，來找出其日文文章表達的特徵。而考察對象選定為志賀直哉以及向田邦子兩位作家。理由主要是前者的志賀直哉，夙有〈小說之神〉之稱呼，並擁大量的作品。而後者的向田邦子則雖與志賀直哉是不同時代的代表作家，也是不同風格的創作。但擁大量創作作品，此點即是相通。

業經仔細分析、考察所得出的結果如下。志賀直哉與向田邦子的文章中，同樣是擁有使用〈提及事件文章〉的特色。同時，文章中也具備了幾個〈提及事件文章〉與非〈提及事件文章〉內容上的雷同。整體而言，即是有排列著共通內容的文章特徵。

如此一來，志賀直哉與向田邦子的作品間所檢視出的文章結構共通特徵，可以說是超越時空，超越文章風格的一個日文文章的共同基本特色的發現。另外，有關日文文章的共同基本特色的深入研究，往後將再擴大至更多的作家以及更大量作品的鑽研。

關鍵詞：志賀直哉、向田邦子、文章風格、文章、結構

airiti

# About the fundamental constitution of text ;from the fundamental constitution to the next stage

Ochiai Yuji

Tankang university Department of Japanese subprofessor

**Abstract**

There are two tide in text research. One tide searches the rule that a text is produced from a sentence. Another tide is the position that observes a text with one unit. This paper check the characteristic of the text constitution of the some quantity work of a writer from the position of latter. One of the object of this paper is Shiga Naoya who is leaving a lot of the work that had regular text constitution .Another person is the Mukouda Kuniko who lived in the fifferent era and written the different type work but her text has the regular text constitution. As a result of survey, the work of Shiga Naoya and Mukouda Kuniko are commonlly including "the text of event statment".Simultaneously, two works are able to arrange the contents that have a common point as a whole work.This paper calls this the text that arranges topics.

There are the text constitutions that is common exceeding the difference of era, writer, type and style, between Shiga Naoya and Mukouda Kuniko. From the survey result, the fundamental constitution of text is two kinds of the text that arrange topics and "the text of event statment". In this way, it has been seen the possibility that checks the common feature in a wider range regarding fundamental text constitution.

Keywords：Shiga Naoya /Mukouda Kuniko /text genre /text /structure/

airiti

# 文章の基本的構成について
## ―基本的構成から次の段階の構成へ―

落合由治
淡江大学日文系副教授

要旨

文章研究には二つの潮流がある。文から文章ができる規則を探究する立場と、文章をはじめから一つの単位とみる立場である。

本論では、後者の立場から、特定の作家の一定量の個々の作品に見られる文章構成の特徴を調べた。対象として、文章に定評があり、一定の文章構成を持った作品を多く残している志賀直哉と、時代やジャンルは異なるが同じように一定の文章構成を持った作品を多く残している向田邦子を選んだ。

調査の結果、志賀直哉にも向田邦子にも共通して永尾章曹の定義する「事件の話をする文章」を含む文章が見られた。同時に、二人のそうした作品は、その中に含まれるいくつかの「事件の話をする文章」とその他の内容とに共通性があり、作品全体としては、共通性のある内容を並べてできている。これを話題を並べる文章と呼ぶことにした。

志賀直哉と向田邦子の間で、ジャンルやスタイルの相違、時代や作家の違いを超えて、共通する文章構成が見られ、その種類は「事件の話をする文章」と話題を並べる文章の二種類が見られるということになる。これにより、基本的な文章構成に関して、より広い範囲で共通性を調べる可能性が見えてきた。

キーワード：志賀直哉　向田邦子　ジャンル　文章　構成

airiti

# 文章の基本的構成について
## ―基本的構成から次の段階の構成へ―

落合由治
淡江大学日文系副教授

### 1. はじめに

文章構成の研究は、従来、大きく二つの観点から行なわれてきた。一つは、文を言語の基本単位とし、それがある規則で連続して有意味な文章や会話を作るという観点である[1]。時枝誠記の「線条性」[2]、M.A.K.ハリディ＆ルカイヤ・ハサンの「結束性」[3]、文章論の市川孝、永野賢などの「連接」、「展開」など[4]、文章展開の意味連関を把握する研究がなされてきた[5]。もう一つは、文章を、文とは異なる質的統一体と認め、その規則を帰納する観点で、時枝誠記は、「線条性」と同時に「統一体」の発想を提起し[6]、その後の松永信一[7]、永

---

[1] M.A.K.ハリディ＆ルカイヤ・ハサン（1997、原著 1976）『テキストはどのように構成されるか』ひつじ書房 P1、ダニエル・ヴァンダーヴェーケン（1996、原著 1990）『意味と発話行為』ひつじ書房 P1 を参照。

[2] 時枝誠記（1960）『文章研究序説』山田書院 P49。

[3] M.A.K.ハリディ＆ルカイヤ・ハサン同注 1 前掲書 P5

[4] 市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版 P22、永野賢（1986）『文章論総説』朝倉書店 P22。市川は、「文脈展開の形態」、「文の連接と配列」、「段落と段落との関係」、「文章の構成」という順序で文章を捉え、永野賢は、「連接論」、「連鎖論」、「統括論」の三方面から文章構造の解明を行っている。

[5] 談話文法による日本語研究として、メイナード・K・泉子（1997）『談話分析の可能性』くろしお出版、野村眞木（2000）『日本語のテクスト』ひつじ書房、ポリー・ザトラウスキー（1993）『日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察―』くろしお出版などがある。

[6] 時枝誠記同注 2 前掲書 P15 には「文章が一つの統一体であるといはれるのは、それが何ものにも従属せず、それ自身、完全に自立してゐるところから、文とは区別される」とある。

[7] 松永信一（1971）『言語表現の理論』桜風社 P61-62 では「一個の文章を一個の記号と考える学説」として S.K.ランガー、C.モリス、時枝誠記を紹介しながら、文章はそれ自体が一個の質的な統一体である記号であるとし、「文章の法則認識を志す場合に、研究対象の等質性の吟味がまず必要なことである」（同書 P73）と述べている。

airiti

尾章曹[8]、長田久男[9]などの研究に進んだ。前者は、文章の個々の特性を捨象し、文という要素が集まって文章・会話が成り立つ一般的規則を探求しているのに対し、後者は、個々の具体的な文章という言語事象（たとえば小説作品）に従い、そこに共通する規則を見出そうとしていると言える。比喩的に、ソシュールの言語研究の区別で言えば、前者は文章のラングの研究、後者は文章のパロールの研究であろう。

これを日本語教育への応用で考えれば、前者は、文章の学習を一般化された文（文型）の積み上げから始めることになり、後者は、作品から始めることになる。どちらを優先するかは、各教授者が決める問題である。本論は、学習者が実際に出会う日本語の具体的場面や作品を理解、模倣できるよう、後者の考え方に従い、将来の教育的応用も睨みながら、その基礎となる文章の基本的構成について、特定の作家に見られた結果を報告するものである。

## 2. 志賀直哉の「作品」の文章構成

まず、基礎となる文章構成の調査として、一定の構成の文章が多く見られる志賀直哉の文章構成を見る。なお、本論で文章構成を捉える方法は、手順が明確な永尾章曹の方法に従った[10]。永尾の方法を再現すると、以下の手順になる。なお、本文は全集に従い、漢字のみ当用漢字に改めた。また、ローマ数字は段落番号、丸数字は文番号、枠囲いは注目点で、いずれも論者による。以降も同じである。

---

[8] 永尾章曹（1975）『国語表現法研究』三弥井書店 P11 では「文章とは、有機的な統一体である言語表現の一全体を意味する。始めがあって、終りがあり、その間に有機的に連続する脈絡があって、それ自体をすべてとして完結している一全体を意味する。たとえば、一作品というようなものである」と述べている。

[9] 長田久男（1995）『国語文章論』和泉書院 P19 では、「文章は、その文章の作り手の、文字言語による一つの『答』として成立する。しかも、成立するとき、その言語表現を統一するものがあること、その言語表現自体が表現の時点で完結し全体をなすことによって、自立する」と述べている。

[10] 永尾章曹（1992）「描写と説明について」『小林芳規博士退官記念　国語学論集』汲古書院 P717-722。

airiti

例1

①或る日の事でございます。②御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになつていらつしやいました。③池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうにまつ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。④極楽は丁度朝なのでございませう。

⑤やがて御釈迦様はその池のふちに御佇みになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。『蜘蛛の糸』

例2

①或る晴れた静かな春の日の午後でした。②一人の小娘が山で枯枝を拾つて居ました。

③やがて、夕日が新緑の薄い木の葉を透かして赤々と見られる頃になると、小娘は集めた小枝を小さい草原に持ち出して、其処で自分の背負つて来た荒い目籠に詰め始めました。『菜の花と小娘』

例1は芥川龍之介、例2は志賀直哉の作品で、違う作家だが、構成はよく似ている。まず、共に冒頭で「或る日のこと」、「或る～午後」（枠囲い部）と具体的な時を示している。続く文②は、「御釈迦様は～御歩きになつていらつしやいました」、「一人の小娘が～拾つて居ました」（二重線部）とあり、共に初めて登場者を出している。さらに、例1の文⑤には「やがて」「御釈迦様は～御覧になりました」、例2の文③にも、「やがて、～頃になると」「小娘は～詰め始めました」（傍線部）とある。共に「やがて」、「やがて、～頃になると」と、時の経過を示し、その時の経過によって、文②で出た登場者が「御釈迦様は～御覧になりました」、「小娘は～詰め始めました」と動き始めている。永尾は、文①を「特定の時の提示」、文②を「文脈起こし」、例1の文⑤、例2の文③を「文脈の展開」と呼び、こうした構成の文章を「事件の話をする文章」と定義した。以下、作品中

airiti

で文と文との間に時の経過を示す表現を入れ、「文脈の展開」の連続を確認することで、文章構成を確認できる。以下、引用符は用いないが、「事件の話をする文章」と「特定の時の提示」、「文脈起こし」、「文脈の展開」の定義はこれに従う。

調査対象は、志賀直哉が生前に刊行した全集の内容を、「作品」、「随筆」、「日記」、「書簡」と分けた「作品」中から『暗夜行路』と日記的作品を除く、中・短編「作品」123 篇とした。調査の結果、第一に、その 121 篇に事件の話をする文章が見られ、大多数に共通する点で、事件の話をする文章は志賀直哉の「作品」の文章の基本的構成であった[11]。第二に、事件の話をする文章を持つ「作品」中には、小説とは異なる構成の作品があることが分かった。第一の結果は、今までも発表してきたので、本論では結果の第二を中心に述べることにし、その代表例として、以下の例を取り上げる。

例 3『子供四題　次郎君』

Ⅰ　①K氏の親類の児で、名は知らぬ。②次男だと云ふから仮に次郎君とする。

Ⅱ　①次郎君の兄さんは音無しい児であるが、次郎君は却々のきかん坊ださうだ。

Ⅲ　①次郎君の家に大きな角火鉢があつて、先生何ぞといふと、それに乗つて困るといふ。②K氏のお母さんは第一あぶないし、それをいやがつてよく叱言を云つた。③その度次郎君は不承々々下りてゐた。

Ⅳ　①或時、下りたと思つて、部屋を出ようとすると何時の間にか又乗つてゐた。②K氏のお母さんは腹を立てて、黙つてにらみつけた。③次郎君も黙つて再び下りたが、直ぐ聞えよがしにこんな独言を云つた。

[11]詳細は、落合由治（2003）『文章の基本的構成についての研究―文章構成の解明から日本語作文教育の枠組み作りへ―』安田女子大学大学院博士論文の第一章、第二章を参照いただきたい。

airiti

④「エエ！　あの婆ア早く死ねばいいなあ」

Ⅴ　①或日、お父さんと湯に入り、先へあがつて、よく拭かずに、行きかけるのでお父さんは風呂の中から、

「風邪をひくぞ。もつとよく拭きなさい」と声をかけた。②次郎君は一寸手を挙げ、三の腕を三三度フウフウと吹いて、其侭いつて了つた。

Ⅵ　①もう一つ。

Ⅶ　①これも或日の事だ。②次郎君は飴を頬張りながら、例の角火鉢の側で何か独りで饒舌つて居た。③そして思はずその飴を灰の中へ落して了つた。④勿論飴は灰まぶれである。⑤先生、それを火箸で摘まみ上げ、残念さうに眺めて居たが、側に居た妹にそれを食へと云ひ出した。⑥妹がいやだと云ふと、どうしても食へと強ひた。

⑦離れた所で、見てゐたお父さんが、

「そんな事を云ふなら、貴様食つて見ろ」と幾らか怒気を含んで云つた。⑧流石の次郎君もこれには一寸参つた。⑨が、直ぐ自分の懐から紙を出すと、それでくるくると飴を巻き自分の口へはふり込んだ。⑩そして頬張つたまま悠々と部屋を出て行つた。

Ⅷ　①却々面白い坊主である。

例３で、まず目に付くのは、第Ⅳ段落文①に「或時」、第Ⅴ段落文①に「或日」、第Ⅶ段落文①に「これも或日の事だ」という特定の時の提示があり、ごく短い文脈の展開が見られ、各段落が事件の話をする文章になっている点である。しかし、この三つの事件の話をする文章は、第Ⅵ段落に「もう一つ」とあることから分かるように、時の経過により、第Ⅳ段落の事件を起点にして、第Ⅴ段落の事件を経て第Ⅶ段落の事件へと展開するわけではない。しかも、三つの事件の話をする文章は、第Ⅳ段落文②「Ｋ氏のお母さんは～默つてにらみつけた」に対し、次郎君が文③、④「～こんな独言を云つた『エエ！あの婆ア早く死ねばいいなあ』」と言い、第Ⅴ段落文①

airiti

「～お父さんは風呂の中から、『風邪をひくぞ。もつとよく拭きなさい』と声をかけた」に対して文②「次郎君は一寸手を挙げ、二の腕を二三度フウフウと吹いて、其侭いつて了つた」、第Ⅶ段落文⑦「～お父さんが、『そんな事を云ふなら、貴様食つて見ろ』と幾らか怒気を含んで云つた」に対して次郎君は文⑨「～、直ぐ自分の懐から紙を出すと、それでくるくると飴を巻き自分の口へはふり込んだ」と次郎君の動きも様々で、互いに無関係な事件のように見える。なぜ三つの事件の話をする文章が並んでいるのであろうか。

読み直すと、三つの事件の話をする文章での次郎君の対応には共通点がある。第Ⅳ段落は「エエ！あの婆ア早く死ねばいいなあ」という思いがけない返答、第Ⅴ段落は「二の腕を二三度フウフウと吹いて、其侭いつて了つた」という父の言葉への素早い切り返し、第Ⅶ段落は「自分の懐から紙を出すと、それでくるくると飴を巻き自分の口へはふり込んだ」という父の怒りをとっさにかわす対応で、両親の言葉に対して、いずれも「次郎君」が相手の予想しない対応をしている。三つの事件は、それぞれ別な時の違う事件だが、共に、両親の言葉への意表をつく対応の事件としては同一である。言い換えれば、「次郎君」は、様々な時に各場合に応じて、相手の予期しない対応を同じようにしていることになり、この作品では、これらの事件の話をする文章を、「次郎君」が相手の予想しない対応をする事件であるという共通性で並べていると言えるであろう。こうして並んだ三つの事件の共通点を基に、次郎君の「きかんぼう」の一面を示す、相手の予期しない対応をするという性格が浮上し、この共通点を踏まえ、第Ⅷ段落で「面白い坊主である」という感慨が述べられていると言えるであろう。

このように、共通性のある内容を並べることで成立する文章構成を、仮に、話題を並べる文章と呼ぶ。志賀直哉の「作品」中には、こうした作品は少なくない。こうした構成を持つ、志賀直哉のその他の「作品」の概要を、以下の表（一）に示す。作品配列は、全集収録順で、作品の長さが様々なため、小話題は示さず共通する大き

airiti

な話題のみを示した。

【表（一）志賀直哉の「作品」中の話題を並べる文章】

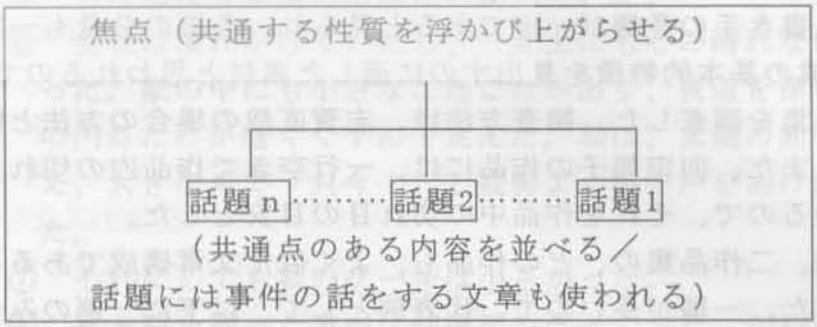
| 作品名 | 共通する内容／（　）内は焦点 |
|---|---|
| 夢から憶ひ出す | 友との交友と回想（夭逝した友への懐旧） |
| 沓掛にて―芥川君のこと― | 芥川との交流の体験（芥川への哀惜） |
| 蟲と鳥 | 庭の鳥と虫の列挙（好奇心と興味） |
| 馬と木賊 | 親子の再会（親子の情の不思議） |
| 淋しき生涯 | 知人との交友の回想（知人への哀惜） |
| 素人玄人 | 動物と動物の闘争（動物の戦いの巧拙） |
| 蝕まれた友情 | 旧友との交友の回想（懐旧と反発） |
| 実母の手紙 | 実母の手紙入手の経緯と実母や祖母の回想（興味と愛惜） |
| 奇人脱哉 | 知人の挿話と回想（奇人ぶりへの感心） |
| 末つ兒 | 末っ子の作者への行動（末っ子の遠慮なさ） |
| 目白と鵯と蝙蝠 | 鳥を飼う経験（好奇心と興味） |
| 朝の試寫會 | 映画での愛欲描写と犬の痴情（無分別と騒擾への嫌悪） |
| 自轉車 | 自転車の回想（熱中した自転車への懐旧） |
| 夫婦 | 妻が夫に余計物を押し付ける（妻の依存心） |
| 祖父 | 祖父の日記の紹介と回想（祖父への愛惜） |
| 白い線 | 批評家と実母を書いた小説への批判（真実認識の困難） |
| 八手の花 | 人生への省察の要求（人生への愛着） |
| 盲龜浮木 | 奇遇の体験（不思議な偶然の一致） |

この構成の文章は、共通性のある話題を並べることで、各話題を通じて一定の共通する性質が浮上して焦点ができ、それが文章全体を統一することで成立していると言えよう。こうした構成の中で、事件の話をする文章は、小説のように、全体として、それが一つの

airiti

事件の話をする文章となるのではなく、各話題を作る下位の文章として使われているのである。その模式図は、以下のようになる。

【話題を並べる文章の模式図】




こうした文章構成の作品は、一般に随筆やエッセーと言われるであろうが、志賀直哉は、こうした形式の作品も、いわゆる小説と言われるジャンルの作品と共に「作品」と呼んでいる。例３の『次郎君』は初期の「作品」、表（一）末の『盲亀浮木』は最後の「作品」で、七十年を超える生涯を通じて志賀直哉の「作品」に見られる文章構成である。今後、志賀直哉が「随筆」として、全集では「作品」と分けたその他の文章も調査しながら、志賀直哉の「作品」と「随筆」の文章構成の全体像を把握することにしたい。

次節では、この話題を並べる文章が、他の作家の場合にも、見られるかどうか、時代を変え、現代の流行作家の文章構成と比較する目的で、向田邦子の作品を取り上げて、見ていきたい。

### 3. 向田邦子の「エッセイ」の文章構成

向田邦子は、テレビドラマの脚本家として、また、直木賞受賞の大衆作家として、没後二十年以上経ても作品が読まれている[12]。その点で、その作品は、日本語教育の教材に普通に使われる、現在の雑誌、新聞掲載の一般的読み物の一代表と見なしえるであろう。

『向田邦子全集』第一巻掲載の三作品集のうち、『眠る盃』(57編)

[12] 向田邦子の出身大学の実践女子大向田邦子文庫が、関連資料収集と研究を進め、再放映、展覧会情報も広告されている(http://www.jissen.ac.jp/library/mukoda/)。

airiti

は、掲載誌の異なる各作品を再編集したもので、作品の題材、長さ、由来などが、掲載誌の相違に応じ様々なので、除いた。残る『父の詫び状』(24編)、『無名仮名人名簿』(52編)の二作品集は、連載作品であり、書き手の意識が一定であると見られ、各編の分量も一定で、文章構成の基本的特徴を見出すのに適した素材と思われるので、この二作品集を調査した。調査方法は、志賀直哉の場合の方法と同じである。また、向田邦子の作品には、一行空きで作品内の切れ目が入っているので、それを作品中の切れ目の目安とした。

その結果、二作品集の、どの作品も、よく似た文章構成であることが分かった。一編が長いので、代表例として、以下に一例のみ全文示す。なお、ローマ数字は節番号、丸数字は各節での段落番号、枠囲いや下線は注目点である。一行アキは、<アキ>で示した。

例4『チーコとグランデ』

Ⅰ① クリスマスにケーキを食べなくなって、もう何年になるだろう。

② 仕事場を持つことを口実に家を出て、かれこれ十五年になるが、十二月も半ばを過ぎると、しがないテレビの台本書きは年末の撮り溜めに追われて、ねじり鉢巻の毎日である。クリスマス・ケーキもプレゼントもご縁のない暮しになってしまった。それでも、街にジングル・ベルのメロディが流れ、洋菓子屋のガラス戸に、

「クリスマス・ケーキの注文承ります」

の紙が貼られると、ふっと十七、八年前のあの晩のことを思い出してしまう。

③ 私は小さなクリスマス・ケーキを抱えて、渋谷駅から井の頭線に乗っていた。

④ あの頃のクリスマス・イヴは、いささか気違いじみていた。三角帽子をかぶって肩を組んだ酔っぱらいと、クリスマス・ケーキを抱えて家路へ急ぐ人の群で銀座通りがごった返した時期

airiti

である。クリスマス・ケーキと鶏の丸焼を買わないと肩身の狭いような雰囲気があった。

⑤　当時私は日本橋の出版社に勤めていた。

⑥　会社は潰れかけていたし、一身上にも心の晴れないことがあった。家の中にも小さなごたごたがあり、夜道を帰ると我が家の門灯だけが暗くくすんで見えた。私は、玄関の前で呼吸を整え、大きな声で「只今！」と威勢よく格子戸をあけたりしていた。

⑦　それにしても私のケーキは小さかった。

⑧　夜十時を廻った車内は結構混み合っており、ケーキの包みを持った人も多かったが、私のは一番小さいように思えた。父はクリスマス・ケーキなどに気の廻るタチではなく、いつの間にかそれは長女である私の役目になっていた。甘党の母や弟妹達の頭数を考えると、やはり小さすぎた。せめてもの慰めは、銀座の一流の店の包み紙だということである。来年はもっと大きいのにしよう、と思いながら、私は眠ってしまった。

⑨　その頃、私は乗りものに乗ると、必ずうたた寝をしていた。内職にラジオの台本を書き始めていたので寝不足だったのだろう。それでも体の中に目覚時計が入っているのか、下りる駅の手前になると必ず目を覚ました。

⑩　終点に近いせいか、車中はガランとして、二、三人の酔っぱらいが寝込んでいるだけだった。下りる支度をしながら、私は、わが目を疑った。私の席の前の網棚の上に、大きなクリスマス・ケーキの箱がのっている。私の膝の上の箱の五倍はある。しかも、私のケーキと同じ店の包み紙なのである。下の座席には誰もいない。明らかに置き忘れである。

⑪　こんなことがあるのだろうか。誰も見ていない。取り替えようと思った。体がカアッと熱くなり、脇の下が汗はむのが自分で判った。

⑫　だがそれは一瞬のことで、電車はホームにすべりこみ、私は

airiti

自分の小さなケーキを抱えて電車を下りた。

⑬　発車の笛が鳴って、大きなクリスマス・ケーキをのせた黒い電車は、四角い光の箱になってカーブを描いて三鷹台の方へ遠ざかってゆく。私は人気のない暗いホームに立って見送りながら、声を立てて笑ってしまった。

⑭　サンタ・クロースだかキリスト様だか知らないが、神様も味なことをなさる。仕事も恋も家庭も、どれを取っても八方塞がりのオールドミスの、小さいクリスマス・ケーキを哀れんで、ちょっとした余興をしてみせて下すったのかも知れない。

⑮　ビールの酔いも手伝って、私は笑いながら、

「メリイ・クリスマス」

といってみた。不意に涙が溢れた。

＜アキ＞

Ⅱ①　五年前に一カ月ほど外国旅行をした。

②　ラスベガスを皮切りに、ペルー、トリニグッド・トバゴ、バルバドスなどのカリブ海の小さな島、ジャマイカからスペイン、パリ、というおかしなコースだったが、その三分の一がスペイン語圏であった。

③　私は英語も覚束ない人間で、スペイン語ときたら、カルメンとドン・ホセくらいしか判らない。

④　レストランに入ると、まず、

「セルベッサ・ウノ・チーコ」

と叫ぶ。

⑤　セルベッサはビール。ウノはひとつ。チーコは小さいという意味である。ビールの小瓶がきたところで、ゆっくりと飲みながらあたりを見廻す。他人様のお料理をチラチラと拝見しておよその見当をつけ、あわてて日本交通公社発行の「六カ国語会話」をめくり、舌をかまぬよう用心しながら、

「デメ・ロ・ミスモ・ケ・ア・アケージャ・ペルソーナ」（あれと同じものを下さい）

airiti

と頼むのである。

⑥ その際、「チーコ」「チーコ」（小さい方よ）と念を押すことを忘れると、ドカンと大きなグランデが出てきて、一種類でおなかがいっぱいになってしまうのである。

⑦ お恥しいはなしだが、四人姉弟で育ったせいか、私は食べものの大きい小さいが気になるタチである。戦争中の食糧不足も影響があるかも知れない。食べ盛りの四人の子供が、食卓にならんでとうもろこし粉の蒸しパンをわける母の手許をじっと見つめる。

「そんな目で見られたら、お母さん、手許が狂ってしまうわよ。物指しを持っといで」

と母はこぼしていた。

⑧ 今から思うと、魚の切身やケーキの大小に、どれほどの差があったとも思えないのだが、大きいのが当ると心が弾んだし、小さいと気持がふさいだ。小さいと文句をいい、母や祖母のと取り替えてもらう。さて自分の前へ置いてみると、前の方が大きく見える。あれはどういう心理なのだろう。

⑨ 父の生いたちの影響もあるかも知れない。

⑩ 幼い時から肩身をせばめ、他人の家を転々として育った父は、大きいものが好きだった。

⑪ 大きい家、大きい家具、大きい松の木、大きい飼犬……。

⑫ 私がまだ五つ六つの年の暮に、私には背丈に余る娘道成寺のみごとな押し絵の羽子板、弟には床の間に飾り切れぬほど大きな絵凧を買ってきて、母や祖母をあきれさせたこともあった。

⑬ 成り上り者の貧しさが、私の血の中にも流れている。いつも上を見、もっともっと大きいのとキョロキョロしていたのに、外国へきたらさすがにゲンナリして、もっと小さいのを、と叫んでいるのである。

⑭ マドリードのマイヨール広場横の、よく行った立ち食い専門の小店では、私が入ってゆくと、おニイさんは、

airiti

「ウノ・チーコ」

と片目をつぶって笑いかける。背丈もチーコ、人間もチーコだなと思いながら、チーコに切ったアサリのパイを突っついていた。

<アキ>

Ⅲ① 新しく住まいを移り、落着いた頃に客がくるのは嬉しいものである。

② 六年前にマンションを買い、それこそ身に過ぎた大きな買物だったから、私は客がくるとこれ幸いと得意になって見せびらかしていた。

③ 或晩、女優のMさんが訪ねてみえた。

④ 案内役は悠木千帆さんだった。当時、私はお二人の出演するドラマの台本を書いていた。Mさんは、――やっぱり本名でいきましょう。森光子さんである。長いおつきあいだし、これがもとで気まずくなるなどという器量の小さい方ではないのだから。

⑤ 森光子さんは、上りぎわに、

「凄く小さいのできまり悪いんですけど」

名古屋の公開録音から帰ったその足で伺ったので、新幹線の中で求めた自分用のですけどと、恐縮されながら、ちょっとおどけたしぐさで小判形のしぐれ蛤を差し出された。

⑥ 私は、あッと声にならない叫び声をあげてしまった。実は台所に、その十倍はあろうかというしぐれ蛤の大箱があったのである。

⑦ 名古屋に住んでいる妹が家を新築した。新宅祝いを送ったお返しが夕方届いたのである。この妹は「握り矢印」とあだ名のあるしまり屋なのだが、マイ・ホームを建ててきげんがいいのか、貯金をはたきついでのヤケッパチなのか、いつに似合わぬ気前のよさで、馬鹿馬鹿しいほど大きな詰め合せを送ってきたのである。

airiti

⑧　森光子さんの名誉のために申し添えるが、彼女は気前のよすぎる人である。苦労人だけあって、お花だご馳走だと、共演の人達の面倒見も実に行き届いた方である。

⑨　しかし、この晩のしぐれ蛤に関していえは、まさにチーコとグランデであった。人間一生の間に、何十回もしぐれ蛤を頂戴するわけでもないだろうに、どうしてこんなおかしなダブリ方をするのだろう、と思いながら、笑いをこらえてお茶を飲み、世間ばなしをしていた。

⑩　ところが、二人の女優さんは、いきなり目くばせをすると、

「お台所やなんか拝見してもいいですか」

とおっしゃる。

⑪　台所は私の設計で、これも自慢のタネである。

「どうぞどうぞ」

と腰を浮かしかけて、ハッとなった。

⑫　台所には、二つのしぐれ蛤の箱が、まな板の上にのっかったベビー靴といった按配で重ねてある。大女優に恥をかかせては申しわけない。

「ちょっと待って。いま片づけますから」

「女同士じゃありませんか。おかまいなく」

「いえいえ。お願い！」

⑬　私は台所へ飛び込むと、グランデの方を、あわてて流しの下に蹴っぽり込んだ。

⑭　その晩、私はやたらにはしゃいだ。

⑮　黙っていると、おかしくて笑えてくるので、絶え間なくしゃべり、ひとりでふざけていた。そして、いまだに森光子さんに借りがあるような、うしろめたい気持を拭えずにいる。誰のせいでもないけど、森光子さん、あの晩は本当に失礼を致しました。

＜アキ＞

Ⅳ①　学生時代に日本橋のデパートで歳末だけアルバイトをしたこ

airiti

とがある。

② 私はレジスターで、最初は金物売場だった。

「臨休」がトイレで「有休」が食事といった符丁も覚え、「湯タンポ二百円」ばかり打つのでうんざりした頃、地下の佃煮売場へ廻された。まだ学生アルバイトの珍しい時分で、私達は随分可愛がってもらった。「おいしそうねえ」といえば、ひょいと脇の下が突つかれて経木にのせたひと口ほどのハゼの佃煮や煮豆が客から見えない高さで差し出された。

③ だがお多福豆だけは別だった。

④ みごとな大粒で、黒光りして並んでいた。値段も飛び抜けて高かった。売場責任者の中年の店員は、時々、目でお多福豆を数えるしぐさをした。数は判っているんだぞ。時につまみ食いを牽制しているようにみえた。

⑤ 雨の日だった。これもアルバイトの男子学生が、開店前に冷蔵庫から佃煮を出してショーケースにならべる作業中、雨靴で床が滑ったのか、お多福豆のバットを取り落し、全部床にぶちまけてしまった。

⑥ 床は、雨靴の泥で濡れている。売場責任者が飛んできた。私はレジの支度をしながら、体を固くして眺めていた。全部で幾らの損害になるのか。しくじりをしたアルバイト学生が顔をこわばらせて何かいいかけた時、責任者の店員は、彼の体を押しのけるようにしてかがむと、手で床に散乱したお多福豆を素早く拾い上げ、ショーケースに納めた。

⑦ 開店ベルが鳴りわたり、気の早い客がチラホラ入って来ている。責任者は、何事もなかったように、

「いらっしゃいませ」

とにこやかに声をかけていた。

⑧ 街は特需景気でわき返り、新しい千円札が出廻りはじめていた。美空ひばりが登場し、金閣寺が焼け、中小企業の倒産が新聞をにぎわせていた頃だった。食糧事情はよくなったといって

airiti

も、まだまだ毎日の暮しは不安定であった。

⑨　今日びこんなことはないだろう。

⑩　だが、私はそれ以来、お多福豆を買ったことがない。

＜アキ＞

Ⅴ①　みかんや苺の時期になると、私はつまらないことに気を遣って、気くたびれすることがある。

②　果物好きだし、客の多いうちなので、冬場だとみかん、苺のシーズンだと苺は大抵買い置きがある。ところが、訪ねて下さる方も私の果物好きをご存じで、手みやげも果物が多いのである。頂いたみかんや苺が、大粒なら気苦労はいらない。「こっちのほうが立派で悪いわねえ」と頂きものはちゃっかり冷蔵庫に仕舞い込んで、お安い「ありもの」をすすめるのもご愛嬢である。

③　だが、頂きものがチーコで、うちにあるほうがグランデだと、そのへんは微妙である。男性の客は鷹揚だが、女性は気にされる。妙に恐縮されて、話もはずまなかったことがあるので、私は頂戴するとさりげなく大きさを調べ、お持たせを出すべきか出さざるべきか考えてしまう。こんなことに気を遣うと、なんとせせこましい人間かと我ながら嫌になるのだが習い性で仕方がない。

④　食べものを見ればさりげなく横目を使い、大きい小さいを較べていた私も、人生の折り返し地点を過ぎ、さすがに食い意地の方も衰えたか、量よりも味の方に宗旨を変えてきたようだ。

⑤　ところが、七年前に父が亡くなり三十五日の法要のあと内々が集って精進落しに鰻重を取った。その席で、お重の蓋を取りながら、私は蒲焼の大きさをくらべているのである。何ということであろう。

⑥　泣き泣きも良い方を取る形見分け

の川柳を笑えない。生れ育ちの賤しさは、死ぬまで直らないものなのだろうか。

airiti

⑦　たとえに引いて恐れ多いが、エリザベス女王などやんごとないお生れの方々は、ケーキやお魚をごらんになっても、大きい小さいなどチラリともお考えにならないものなのだろうか。

⑧　上つがたに知り合いのあろう筈もなく、伺ってみたことはないが、いつか何かの間違いでお目通りを許される機会があったら、そのへんの機微などお伺いしたいものだと思っている。

この作品は、第Ⅰ節から第Ⅴ節まで、一行アキによって五節に分かれている。各節の主な内容は、以下のようである。まず、第Ⅰ節の③段落から⑮段落までは、②段落の最後に出ている「十七、八年前のあの晩」の事件で、③段落の「私は小さなクリスマス・ケーキを抱えて、渋谷駅から井の頭線に乗っていた」から始まる事件の話をする文章である。第Ⅲ節も③段落の「或晩、女優のMさんが訪ねてみえた」から始まる事件の話をする文章であり、第Ⅳ節も「学生時代に日本橋のデパートで歳末だけアルバイトをした」ときの、「雨の日だった」から始まる事件の話をする文章である。第Ⅱ節は「五年前に一カ月ほど外国旅行をした」ときのいつもの食事の注文で、途中⑦から⑫段落に子供時代の内容を重ねて「食べ物の大小が気になる」自分への感懐が挟まれている。第Ⅴ節は①から③段落が「みかんや苺の時期」の「おもたせ」の悩みで、④⑤段落が「七年前に父が亡くなり三十五日の法要のあと（中略）鰻重を取った」ときのことで、⑥⑦⑧段落にそうした自分への感懐がある。

以上、先に見た志賀直哉の作品と同様、向田邦子の作品でも、文章構成の特徴として二つ大事な点を指摘できる。第一は、事件の話をする文章が共に見られるということである。二人の作家が属している戦前期と戦後期という時代の違いや、純文学と大衆文学というジャンル・スタイルの違いを超えて、こうした作家の作品間でも共通して事件の話をする文章が見られるのである。

第二に大事なことは、作品全体では、各節の別々な事件の話をする文章やその他の内容が、共通性を持っているという点である。

airiti

つまり、第Ⅰ節から第Ⅴ節⑤段落まで、「クリスマス・ケーキ」、「海外の料理の注文」、「しぐれ蛤」、「お多福豆」、「おもたせのみかんや苺」、「鰻重」と全て、その当時は珍しかった食物の話題で、しかも各内容とも、その食物の「大小」「価格の高低」に拘泥する内容である。第Ⅰ節では小さい「ケーキ」を気にした作者が大きい「ケーキ」に「取り替えようと思った」。第Ⅱ節も、いつも大きいものを欲しがる作者が外国旅行では小と「叫んでいる」。第Ⅲ節も手土産に小さい「しぐれ蛤」をもらった作者が自家にある大きい「しぐれ蛤」と比べて「あっと叫んだ」。第Ⅳ節でも、ぶちまけた「お多福豆」を担当者が、高価なため捨てずに「素早く拾い上げ、ショーケースに納めた」。第Ⅴ節①から③段落は、頂き物とおもたせの大きさを「調べる」。第Ⅴ節④⑤段落も、「蒲焼」の大小を「くらべている」。いずれもその場の食物の大小、高価安価の比較選択にあくせくする話である。

また、第Ⅱ節の「外国旅行」の内容に挟入された⑦から⑫段落の「食べ物の大小が気になる」自分への感懐も、やはり同じ話題を繰り返している。⑦段落は、「食べ盛りの四人の子供が、（中略）蒸しパンをわける母の手許をじっと見つめる。『（中略）』と母はこぼしていた」とあり、子供たちが食物の大小を気にし、⑧段落も「大きいのが当ると心が弾んだし、小さいと気持がふさいだ。小さいと文句をいい、母や祖母のと取り替えてもらう。さて自分の前へ置いてみると、前の方が大きく見える」と、食べ物の大小での自分の一喜一憂を言っている。⑨から⑫段落も、父が大きいものにこだわったことである。以上、⑦段落が兄弟、⑧段落が自分、⑨から⑫段落が父と、主体は異なるが、すべて「食べ物の大小」を気にし、物の大小にこだわる話題で、どの内容も作者が影響を受けた子供時代のことを言っている。

以上、『チーコとグランデ』では、各節の共通点として、珍しい食物の「大小」「高価安価」の比較選択にこだわる人間の利害打算、いわば利養心の滑稽さを焦点として浮上させている。そして、この

airiti

焦点をふまえた上で、最後に「泣き泣きも良い方を取る形見分けの句を笑えない」以下の感慨を述べていると言えるであろう。以下に、それを模式図で示す。

【『チーコとグランデ』の模式図／話題を並べる文章】

焦点（浮かび上がる性質＝利害打算する利養心のおかしさ）

Ⅴおもたせ・蒲焼の大小＊　Ⅳお多福豆の高価＊　Ⅲしぐれ蛤の大小＊

Ⅱ食事の注文の大小　Ⅰケーキの大小＊

（共通点＝珍しい食べ物の大小・値段にこだわる）

＊は事件の話をする文章

この向田邦子の作品『チーコとグランデ』も、志賀直哉の『次郎君』と同様、共通性のある内容を並べ焦点を作ることでできる話題を並べる文章である。こうした話題を並べる文章は、向田邦子のエッセイ集の他の作品でも同様に見られるが、調査対象全作品を示すことはできないので、調査した『父の詫び状』、『無名仮名人名簿』中から、『父の詫び状』各作品での共通した話題を以下の表（二）に示す。なお、表の欄内の数字は一行アキで示されている各節の番号で、共通する話題が二つ以上ある場合は、それを併記している。

【表（二）『父の詫び状』の文章構成】

| 作品名 | 共通する内容／（　）内は焦点 |
|---|---|
| 父の詫び状 | 1～4 玄関と靴に関係した話題<br>2～4 父の心情表現の不器用さ（懐かしさ） |
| 身体髪膚 | 1～6 怪我や病気の話題（父母の保護への感謝）7 感慨 |
| 隣の神様 | 1～5 葬儀に関係した話題<br>1～2 こらえ性がない私や父の性格<br>3～5 お葬式の話題（場にそぐわない人の行動のおかしみ） |

airiti

| | |
|---|---|
| 記念写真 | 1 記念写真の今昔<br>2～5 写真への悲喜の記憶（懐かしさ） |
| お辞儀 | 1～4 性格の判る人のたしなみ<br>2～4 母父のお辞儀を見る衝撃（恩を知る）<br>5 感慨 |
| 子供たちの夜 | 1 原稿依頼<br>2～5 子供の頃の夜の記憶（両親の愛情のに包まれた子供時代） |
| 細長い海 | 1a「蝦蟆口」<br>1b～5 海水浴での被害の記憶（懐かしさ）<br>6 感慨 |
| ごはん | 1～4 開放感と後ろめたさを感じる経験<br>2～4 心に残る食事（懐かしさ） |
| お軽勘平 | 1～4 正月に関係のある記憶<br>3～4 作者のただ一度のお正月らしい経験（ふさわしくないものとふさわしもの） |
| あだ桜 | 1 昔話のおもしろさ<br>2～3 一日延ばしの性格の失敗談（滑稽さ） |
| 車中の皆さま | 1～6 想い出に残るタクシー運転手（個性的人物のおもしろさ）7 感慨 |
| ねずみ花火 | 1～4 ふと思い出した知人の死の想い出（寂しさ）5 感慨 |
| チーコとグランデ | 1～5 食べ物の大小、貴賤にこだわる（人の利養心のおかしさ）／感慨 |
| 海苔巻の端っこ | 1～4 端っこが好き（こだわりのおかしさ） |
| 学生アイス | 1～6 アイスクリームの思い出（自家製のアイスやアイスクリーム売りアルバイトの懐かしさ） |
| 魚の目は泪 | 1～7 魚や動物の目にこだわる思い出（こだ |

airiti

| | |
|---|---|
| | わりのおかしさ）7「魚の目」の体験 |
| 隣の匂い | 1～3 家の隣人の思い出（懐かしさ） |
| 兎と亀 | 1～2 アマゾン旅行の思い出（新世界への驚き） |
| お八つの時間 | 1～4 子供時代のお八つ（懐かしさ）4 感慨 |
| わが拾遺集 | 1～4 拾い物や落とし物の思い出（失敗のおかしさ） |
| 昔カレー | 1～4 食物と家族の記憶（懐かしさ）5 感慨 |
| 鼻筋紳士録 | 1～7 鼻の格好（性格の違いのおかしさ） |
| 薩摩揚 | 1～4 鹿児島時代の記憶（懐かしさ）5 感慨 |
| 卵とわたし | 1～7 卵の思い出（こだわり）8 感慨 |

以上のように、『父の詫び状』のいずれの作品も、各節に共通した内容が並び、何らかの焦点が生まれて作品が構成されていることがわかる。また、『チーコとグランデ』で見たように、節の内容には、思い出を書く形で事件の話をする文章が多く含まれている。これは、以上の『父の詫び状』24 編ばかりではなく、『無名人仮名目録』52 編も同様で、やはり思い出を書く形で事件の話をする文章が多く含まれ、また、共通性のある内容を並べた話題を並べる文章で書かれていた[13]。こうした作品は向田邦子の「エッセイ」では普通に見られる、「エッセイ」での基本的文章構成であると言える。

## 4. おわりに

志賀直哉と向田邦子の文章構成の共通点は、第一に事件の話をする文章を含む文章である。第二に、共通性のある内容として個々の事件の話をする文章やその他の内容を並べ、話題を並べる文章という次の段階の文章を作っている。事件の話をする文章を基に、話題

[13] 紙数の関係で、調査した全体を紹介することができない。本論で示した『次郎君』『チーコとグランデ』で行ったのと同様な手続きで、内容について、事件の話をする文章が見られるかどうか、また、全体としての構成はどうかを調べた。機会を改めて、その他の特徴とともに、まとめることとしたい。

airiti

を並べる文章という次段階の文章構成があると言ってよいであろう。

こうした構成の作品は、志賀直哉の場合は「作品」、向田邦子の場合は「エッセイ」として全集に収録されているが、大事なことは、類似した文章構成が、各々異なるジャンルで、時代や作家の違いを超えて見られ、しかも、その種類が一定しているということであろう。違う時代の違うジャンルの作家の文章構成には共通点がほとんどないということならば、文章に関する研究は、作家の文章の個性や時代的特徴を把握する方向にしか進みえないであろうが、違う時代の違うジャンルの二人の作家の一定量の作品を同じ方法で調べた結果、共通する文章構成が多く見出され、しかもその種類が一定しているならば、作家の違いを超えて見られる文章の基本的構成を探求する可能性が具体的になるからである。

また、文章の基本的構成に共通性があり種類が一定していれば、教育内容を系統立てていく尺度ができ、整理も容易であり、その成果を日本語教育へ応用することも可能となるであろう。紙数もすでに尽きたので、今後、こうした調査を反復し、文章の各基本的構成の具体的特徴を追求しながら、文章構成の基礎的研究を日本語教育に応用する道を改めて提示していきたい。

テキスト

岩波書店編 1973-74『志賀直哉全集』第一巻～第四巻
講談社編 1987『向田邦子全集』第一巻

参考文献（引用文献のみ）

時枝誠記 1960『文章研究序説』山田書院
永尾章曹 1975『国語表現法研究』三弥井書店
永尾章曹 1992「描写と説明について」『小林芳規博士退官記念　国語学論集』汲古書院
長田久男 1995『国語文章論』和泉書院
松永信一 1971『言語表現の理論』桜風社